

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 6月 7日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21320062

研究課題名（和文） 陶酔と技術—ドイツ語圏の世紀転換期における文学・芸術についての総合的研究

研究課題名（英文） “Rausch” and Technique— Literature and Arts in the German-speaking Countries around the Fin de Siècle

研究代表者

鍛治 哲郎（KAJI TETSURO）

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：30135818

研究成果の概要（和文）：「陶酔と技術」という観点から、1900年前後のドイツ語圏の文学と芸術を再検討することによって、美的陶酔の表現が巧みな技術・技巧をもとに達成されていること、および、集団的陶酔の表現が機械・技術のイメージを利用していることを明らかにした。また劇場空間やプロパガンダにおいて集団的陶酔を生み出すために技術と演出が果たす役割についても具体的に指摘できた。さらに、陶酔という観点が、当時の学問・思想のなかにも活かされていることを跡づけた。なお、「陶酔」という概念で念頭においているのは、自我の統一性や意識による支配の失効および集団・群衆との一体感である。

研究成果の概要（英文）：In this project it was carved out that the aesthetic expression of “Rausch” (frenzy, intoxication) around 1900 is achieved through technique and technology, and the expression of collective “Rausch” uses the images of machines and technique. It was specifically pointed out which function techniques of staging that evoke collective “Rausch” had for theater and political propaganda, and it was shown that the viewpoint of “Rausch” is also reflected in contemporary science and the intellectual discourse. The notion of “Rausch” implicates to loose the control about the integrity and awareness of the ego and the merge into the collective.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	6,800,000	2,040,000	8,840,000
2010年度	4,900,000	1,470,000	6,370,000
2011年度	2,800,000	840,000	3,640,000
年度			
年度			
総計	14,500,000	4,350,000	18,850,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学

キーワード：独文学、文化学

1. 研究開始当初の背景

19世紀末から20世紀の30年代にかけてのドイツ語圏においては、文学・芸術相互の間の接触と交流は、文学・芸術上の革新の機運と相まって活発になるが、この時代の文学・芸術・思想を対象とする研究は、時系列をも

とにした文学史ないしは芸術史上の概念をもとに行われるのが通例であった。東京大学大学院総合文化研究科には、当該分野に取り組む研究者が複数所属しており、それぞれの領域で優れた研究を重ねてきているので、協力して新たな視点からこの時代の文化を問

い直そうという計画が生まれた。

2. 研究の目的

この研究の目的は、19世紀末から20世紀の30年代にかけてのドイツ語圏における、文学・芸術および思想を、分野やジャンルを超えて、また既成の文学史・芸術史上の概念にとらわれずに、「陶酔と技術」という観点から総合的に捉え直すことにある。なお、「技術」という言葉では、ハード面の技術と、ソフト面つまり表現上の工夫という二つの意味が含まれている。

3. 研究の方法

「陶酔と技術」という観点から、年度ごとにテーマを設定して、研究会で議論を重ね、年度末にシンポジウムを開催する。初年度は「陶酔と美」を、次年度は「群衆と陶酔」を、最終年度は「陶酔と学知」をテーマとして研究を進める。

4. 研究成果

初年度は「陶酔と美」をテーマに3度の研究会で議論を重ね、総括として2月20日と21日の2日間に渡って国際シンポジウム Rausch und Ästhetik im deutschsprachigen Raum um 1900 「ドイツ語圏世紀転換期における陶酔と美」を開催した。この催しは、本プロジェクトに関わる8名全員（鍛冶、ゴチェフスキ、シュトゥンプ、高橋、竹峰、田中、長木、森田）が講演ないしは司会・コメンテーターをつとめ、さらにフンボルト大学からヘルマン・ダヌーザ Hermann Danuser 教授（音楽史）、ボーツェン自由大学からイェルク・グライター Jörg H. Gleiter 教授（建築デザイン）、慶應義塾大学からヨーゼフ・フルンケース Josef Fürnkäs 教授（文学・思想）、京都大学から岡田暁夫准教授（音楽学）を招待して行われた。フリードリヒ・ニーチェの思想と芸術観を参照しつつ、19世紀末から第1次大戦期にかけての思想（主にニーチェ、ベンヤミンら）、文学（主にトラークル）、演劇（主にラインハルト）、音楽（主に R. シュトラウス、シェーンベルク）、造形芸術（主にアドルフ・ロース）などの領域において、「陶酔」という観点をもとに論じた場合に、どのような表現上の技法が開発されたかという問いを巡って、9つの講演と活発な討論がなされた。このシンポジウムの意義は、この時代の様々な分野における芸術的革新を支えた技法と技巧が、技術的なものと対照的な「陶酔」という視点からみることによって、従来と異なる角度からより鮮明にまた相互関連的に把握できたことである。海外からの参加者からも斬新な切り口について高い評価を受けた。なお、すべてドイツ語によってなされたが、聴衆は両日ともに学内外から十分に集まり、特

に院生を初めとする若い研究者に対しては、日本において英語以外の外国語による高度の学問的シンポジウムが可能であることを示した点も大きな成果であった。

22年度は、第1次大戦後から30年代初めまでの時代を対象として、6月、7月、12月に研究会を開き研究成果を持ち寄るとともに、二つの公開シンポジウムを企画実施した。一つは、10月9日に長木誠司とゴチェフスキヘルマンが中心になり穴山朝子（御茶の水大学）と韓国から李京粉（ソウル大学）の両氏を招き「プロパガンダと音楽」のテーマのもとに開催した。政治的に左右両派が激しく対立抗争を繰り返した20年代の大衆文化とくに音楽、オペラ、映画を対象にした刺激に富む発表がなされた。議論も活発に交わされ、大衆を煽動・動員するための表現技術的側面を明らかにすることができた。年度末には、3月12日13日にドイツからベルント・シュティエグラ Bernd Stiegler（コンスタンツ大学）とカイ・ファン・アイケルス Kai van Eikels（ベルリン大学）の両氏を招き、代表者と分担者全員参加の下に国際シンポジウム「陶酔と制御」を企画したが、3月11日の震災のために12日のみ公開の形を取り、13日は内輪での集まりにとどめざるをえなかった。しかしながら事前に発表原稿が回覧されていたので、短い時間ではあったが、事前の準備会を含めて有益な意見交換ができた。とくに、群衆や集団の描かれ方が技術および機械の表象と深く関連している様子を、陶酔と制御という二つの観点を導入することによって鮮やかに把握することが可能になった。また、技術の進歩による劇場の設計と建造が集団的な陶酔の演出に果たした役割を具体例によって示し得たこと、および集団・群衆の一体感とは対照的に、あるいはその裏面として、個人の人格の分裂や狂気の問題が時代の文学・芸術に潜んでいた様子も取り出し得たことは、大きな成果であった。

最終年度は、7月に第一回の研究会を開き、高橋が世紀転換期から20年代の演劇における集団表象について、長木がアドルフ・ノアのオペラ論をもとにヴァーグナー以降の集団の扱いかたについて報告を行い、分担者の間で活発な意見交換がなされた。また12月開催の第二回の研究会では、鍛冶がベンとフェレンツイとの同時代性についての報告を行い、それに対して竹峰が映像メディアの領域との関連からコメントを加え、参加者全員で文学・芸術と学問・思想との平行性について議論を交わした。本年度は年度末にドイツ語圏から研究者を招待して「陶酔と学知」をテーマに国際シンポジウムを開催する予定であったが、招待者の目処がつかず断念せざるをえなかったが、そのかわりに3月24日にコロキウム「陶酔の演出、陶酔の思想—世紀転

換期ドイツ語圏の芸術と思想」を開催して最終年度の締めくくりとした。この催しでは、高橋が当時出現した大劇場での演出について発表し、他大学から招待した中村仁(桜美林大学)がベンの詩にどのようにヒンデミットが曲をつけたかを分析した。また森田が後期ベンヤミンのなかに孕まれた技術と陶酔の問題を思想的に照らし出した。鍛冶は、本年度のテーマである学知と陶酔という観点から、ベン、フェレンツィ、ユンガーの海のイメージと生物学との関係を論じた。以上のように、本年度は今まで十分に論じられてこなかった 20 世紀初頭の学問および技術と陶酔の関連について検討して一定の見取り図を描くことができた。また、それによって今後の新たな研究の展望を開くことが可能になった。

なお、本研究で得られた成果は、24 年度からの科学研究費助成事業「科学の知と文学・芸術の想像力—ドイツ語圏世紀転換期の文化についての総合的研究」に引き継がれる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 47 件)

- ① 長木誠司、ディスク遊歩人(30)時節柄の時事オペラ—81 年前のジャズ、レコード芸術、査読無、60(6)、2011、68-72
- ② 長木誠司、ディスク遊歩人(33)オペラのなかの聞こえない歌(1)、レコード芸術、査読無、60(9)、2011、62-66
- ③ 田中純、希望の寓意—「パンドラの匣」と「歴史の天使」、UP、査読無、464 号、2011、42-48
- ④ 田中純、世界模型のかげら—「思考のイメージ」としてのダイアグラム、UP、査読無、473 号、2011、55-61
- ⑤ ゴチェフスキ ヘルマン、音楽をめぐる東西の異文化交流 2000 年—平成の天平文化—、音楽教育学、査読無、第 41 巻第 2 号、2011、27-33
- ⑥ 森田團、新しさと永遠回帰—ヴァルター・ベンヤミンにおけるファンタスマゴリーの理論、西南学院大学 国際文化論集、査読無、第 26 巻・第 2 号、2012、157-177
- ⑦ 森田團、能動知性と歴史—坂部恵の哲学におけるベンヤミン、別冊水声通信 坂部恵、査読無、2011、226 - 238
- ⑧ 竹峰義和、Du musst Caligari werden! Selbstverlust und Rausch im Weimarer Kino、桜門論叢、査読有、80 号、2011、121-131
- ⑨ 鍛冶哲郎、Auflösung und ästhetische Gestaltung: zum Rauschanalogon in der

Dichtung Georg Trakls、言語・情報・テクスト、査読無、17、2010、1-8

- ⑩ 長木誠司、ディスク遊歩人(22)博物館と歌劇場と、レコード芸術、査読無、59(10)、2010、64-68
- ⑪ 長木誠司、ディスク遊歩人(14)両大戦狭間にさまよえるオペラ、レコード芸術、査読無、59(3)、2010、68-72
- ⑫ 田中純、都市の持続的変容について、建築雑誌、査読無、1611、2010、38-39
- ⑬ 田中純、表象・身体・生理学—ショーペンハウアーと 19 世紀の視覚経験、ショーペンハウアー研究、査読有、15、2010、78-100
- ⑭ Gottschewski Hermann、Absolute Pitches in Chopin's Narrative Style: With a Focus on Ballade No. 4、Journal of Music and Theory (ed. Seoul National University, Western Music Research Institute)、査読無、15、2010、40-66
- ⑮ 竹峰義和、ハリウッドの精神からの全体主義の誕生—アドルノの文化産業論をめぐって、桜門論叢、査読有、77、35-54
- ⑯ 竹峰義和、気散じと陶酔の弁証法: ベンヤミンとアドルノのワグナー解釈における映画的モチーフをめぐって、年刊ワグナー・フォーラム、査読無、2010 年号、2010、98-113
- ⑰ 高橋宗五、ブレヒト演劇における Gestus の問題あるいはテクストと舞台のあいだ(上)、東京大学総合文化研究科・教養学部「外国語紀要」、査読無、14、2009、24-49
- ⑱ 長木誠司、ディスク遊歩人(3)オペラ/夢と記憶、レコード芸術、査読無、58(3)、2009、66-70
- ⑲ 長木誠司、ディスク遊歩人(6)演出家とその影、レコード芸術、査読無、58(6)、2009、92-96
- ⑳ 田中純、Historische Analyse der Bilder oder Bilderanalyse der Geschichte: Morphologie der Bilder in Aby Warburgs Mnemosyne、東京大学大学院総合文化研究科「超域文化科学紀要」、14、2009、141-169

〔学会発表〕(計 34 件)

- ① 鍛冶哲郎、海、陶酔、眠り—ベン、フェレンツィ、ユンガー、コロキウム「陶酔の演出、陶酔の思想—世紀転換期ドイツ語圏の芸術と思想」、2012/3/24、東京大学・駒場
- ② 高橋宗五、大劇場における演出がはらむ問題—マックス・ラインハルトとエルヴイン・ピスカートアの場合、コロキウム「陶酔の演出、陶酔の思想—世紀転換期ドイツ語圏の芸術と思想」、2012/3/24、東京大学・駒場
- ③ Gottschewski Hermann、Liszt's article

- "Clara Schumann" (1854) and his theory of performance, Liszt Festival, International Academical Symposium, 2011/11/12, Yonsei University (韓国)
- ④ 森田團、カタストロフと悲劇—ベンヤミンの「歴史の天使」、COE・UTCP シンポジウム「カタストロフィーと共生の哲学」、2012/3/5、東京大学・駒場
- ⑤ 森田團、陶酔と技術—ヴァルター・ベンヤミンの〈人間学的唯物論〉、コロキウム「陶酔の演出、陶酔の思想—世紀転換期ドイツ語圏の芸術と思想」、2012/3/24、東京大学・駒場
- ⑥ 高橋宗五、Totaltheater als Theatermaschine. Begeisterung und Erkenntnis im politischen Theater Erwin Piscators, 本科研主催国際シンポジウム「陶酔と制御—1920年代を中心とするドイツ語圏の文学・芸術・思想」、2011/3/1、東京大学・駒場
- ⑦ 長木誠司、指揮者・近衛秀麿の戦中期、日本音楽学会第61回全国大会、2010/11/6、愛知芸術文化センター12階アートスペース
- ⑧ 長木誠司、時事オペラにおけるプロパガンダーエルンスト・クシュネックと20年代、本科研主催シンポジウム『プロパガンダと音楽』、2010/10/9、東京大学駒場キャンパス
- ⑨ 田中純、Analyses of Urban Representations: Politics, Aesthetics and Poetics of the (Post)-Modern City, Urban Sustainable development in the context of global change, 2010/10/8、ベトナム国家大学ハノイ校
- ⑩ Hermann Gottschewski、Propaganda und Ästhetik: Über die Politisierung der Kunst in der Weimarer Republik, insbesondere in der nationalsozialistischen Bewegung, 本科研主催シンポジウム『プロパガンダと音楽』、2010/10/9、東京大学駒場キャンパス
- ⑪ Hermann Gottschewski、ショパンのペダル指示に関する演奏解釈(韓国語による)、延世大学校音楽研究所主催公開講座およびワークショップ、2010/11/29、延世大学(韓国)
- ⑫ 森田團、想起と直観的悟性—ベンヤミンの歴史哲学テーゼ、西日本哲学会、2010/12/5、鹿児島大学
- ⑬ 竹峰義和、西部からの呼び声: ナチス政権下のルイス・トレンカー監督作におけるアメリカ表象、日本映像学会第9回映像テキスト分析研究会、2010/7/10、早稲田大学国際会議場第三会議室
- ⑭ 竹峰義和、Du musst Caligari werden! Rausch und Selbstverlust im Weimarer Kino, 本科研主催国際シンポジウム「陶酔と制御—1920年代を中心とするドイツ語圏の文学・芸術・思想」、2011/3/12、東京大学・駒場
- ⑮ Gottschewski Hermann、The role of synthesis in performance theoretical studies, ソウル大学西洋音楽研究所(招待講演)、2010年3月19日、ソウル
- ⑯ 森田團、歴史哲学と決断—高坂正顕の場合、日中哲学フォーラム(主催:日本哲学会・中華日本哲学会)、2009年4月26日、中国・遼寧大学
- ⑰ 竹峰義和、Dialektik von Zerstreuung und Rausch: Benjamin, Wagner und Film, 国際シンポジウム「陶酔と美」、2010/2/21、東京大学・駒場
- ⑱ 高橋宗五、Festlichkeit und Max Reinhard, 国際シンポジウム「陶酔と美」、2010/2/20、東京大学・駒場
- ⑲ 鍛冶哲郎、Auflösung und ästhetische Gestaltung: zum Rauschanalogon in der Dichtung Georg Trakls, 国際シンポジウム「陶酔と美」、2010/2/21、東京大学・駒場
- ⑳ 田中純、Dandyistische Architektur und Ornamenttausch. Der architektonische Stil bei Adolf Loos, 国際シンポジウム「陶酔と美」、2010/2/20、東京大学・駒場
- [図書] (計11件)
- ① 鍛冶哲郎(共著)、原研二先生追悼論文集刊行会、文学における不在(「境界のメッセージ—トラークルの結合の詩法と揺らぐ意味の闕」、2011、258(167-178)
- ② 長木誠司(共著)、音楽之友社、新モーツァルティアーナ(アドルノとオペラ 市民社会的音楽ジャンルへの批判と通路)、2011、745(441-451)
- ③ 田中純、平凡社、建築のエロティシズム—世紀転換期ヴィーンにおける装飾の運命、2011、201
- ④ Hermann Gottschewski(共著)、Schliengen、Ereignis und Exegese. Festschrift für Hermann Danuser zum 65. Geburtstag, 2011、613-623
- ⑤ 竹峰義和(共著)、青弓社、貴志康一と音楽の近代(第3部第2章「欲望のコロニアルな対象」)、2011、259(229-242)
- ⑥ 長木誠司、作品社、戦後の音楽 芸術音楽のポリティクスとポエティクス、2010、517
- ⑦ 田中純、羽鳥書店、イメージの自然史—天使から貝殻まで、2010、332
- ⑧ 森田團、水声社、ベンヤミン—媒質の哲学、2011、536

- ⑨ 竹峰義和(共著)、iudicium (München)、
Figuren des Transgressiven –das Ende
und der Gast、2009、156-167
- ⑩ 森田團(共著)、中央公論新社、日本哲学
小史—近代 100 年の 20 篇、2009、178 -
185

[その他]

ホームページ等

<http://phiz.c.u-tokyo.ac.jp/~rausch>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鍛冶 哲郎 (KAJI TETSURO)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：30135818

(2) 研究分担者

高橋 宗五 (TAKAHASHI SOGO)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：10134404

長木 誠司 (CHOKI SEIJI)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：50292842

田中 純 (TANAKA JUN)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：10251331

ゴツェフスキ ヘルマン

(GOTTSCHESKI HERMANN)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：00376576

竹峰 義和 (TAKEMINE YOSHIKAZU)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授

研究者番号：20551609

森田 團 (MORITA DAN)

西南学院大学・国際文化学部・講師

研究者番号：40554449

(3) 研究協力者

ガブリエーレ・シュトゥンプ (Gabriele

Stump) 元東京大学外国人教師